

川端康成 *The Master of Go* における感情表現の描写*

瀬 良 晴 子

1. はじめに

川端康成作『名人』の、エドワード・サイデンステッカーによる英語訳 *The Master of Go*¹ について、感情表現に焦点をあてて意味分析を行う。瀬良（2014）では、同じく川端康成作『雪国』のサイデンステッカー訳 *Snow Country*² の感情表現を調べた。翻訳と原作の比較をするのではなく、*Snow Country* という作品における感情表現を分析した。本論でも同様に、*The Master of Go* における感情表現を分析する。分析に用いるソフトウェアが英文用のものであり、前述の瀬良（2014）や、*After Dark*（村上春樹原作、ジェイ・ルービン訳）を分析した Sera（2015）などと同じ手法を用いて意味分析し、比較を可能にするためでもある。原作と翻訳の間には、さまざまな違いがあることが考えられる。しかし、本論やそれに先立つ一連の研究では、英語訳における感情表現の分析と、英語訳を読んだ読者の印象や批評を比較しているので、翻訳に関する問題点は、本研究の当面の研究課題ではない。

The Master of Go は、1938年に行われた本因坊秀哉名人の引退碁の試合について、川端が2つの新聞のために書いた観戦記に基づいている。小説として発表されたのは戦後である。英語訳の裏表紙には、次のように、この作品の概要が書かれている。

In 1938 Kawabata covered a championship Go match for two leading Japanese newspapers. But it was not until well after the Second World War that he published the events of that epic contest as fiction and when he did so he was faithful to his famous declaration of 1945: that henceforth he would only write elegies.

The Master of Go is indeed an elegy both to the skill and distinction of a great player and to the old aristocratic mores of which Kawabata was a passionate disciple. In the contest the young challenger is aggressive, ebullient, lusting for battle; the Master aged, frail, solitary. Their confrontation symbolizes the clash between generations, between ideals, between old and

* 本稿は、2015年11月台北科技大学（台湾）で開催された APLX2015 (International Conference on Applied Linguistics) における口頭発表「Depictions of Emotions in Yasunari Kawabata's *The Master of Go*: A Semantic Analysis」を基にしている。

¹ 原作の『名人』は1951年の出版であるが、本論では1976年の Penguin Books の英訳版を用いている。本文中の本作品引用に際してのページ数は、この版のものである。

² 原作の『雪国』は1937年の出版であるが、本論では1957年の C.E. Tuttle 版を用いている。本文中のこの作品引用に際してのページ数は、この版のものである。

new Japan. Throughout, the Master is a figure of loneliness and sadness, but a protagonist who in the face of defeat and death maintains his dignity to the end.

(下線は論者)

ここでは、この試合を、単に碁における対決であるだけでなく、新旧の日本の対決ととらえている。名人 the Master は、川端自身が尊敬の念をいだいていた碁の伝統の最後の担い手であった。年若い、病をおして引退試合にのぞみ、敗れても威厳を保つその姿からは、loneliness と sadness という感情が、呼び起こされる。

サイデンステッカーは、翻訳に寄せた Introduction で、この作品を‘a sad, elegant piece of reportage’(p.5)であるとしている。また本因坊秀哉については、‘Shusai the Master becomes a sad and noble symbol’(p.6)と述べている。悲しさ (sad) と高貴さ・威厳 (noble, dignity)は、本作品における感情表現を考える上で、重要な要素であることが予想される。

2. 分析方法

意味分析をするにあたっては、これまでの研究と同様、ウェブ上で使用するコーパス分析・比較のためのソフトウェア、Wmatrix³ を用いた。まず、テキストをスキャナで読み込み、OCR で文字認識し、テキストファイルを作成した。読み取りミスなどについて、手作業で確認・修正した後、Wmatrix にテキストファイルをアップロードした。その後、Wmatrix に備わっているコーパスのうち、BNC Sampler Written⁴ を参照コーパスとし、主に意味のレベルで、比較検討を行った。Wmatrix では、比較のための統計指標として、LL (the log-likelihood statistic) が用いられている。以下、LL と省略している。この数値で 6.63 が、統計的に有意であるかどうかの境界である。つまり、2つのコーパスを比べて、ある語や、ある意味カテゴリーについて、この数値がおよそ7以上であれば、どちらかのコーパスに、それらの語やカテゴリーが統計的に多く用いられていると考えることができる。また、Wmatrix は、意味分析のために USAS Tagset (UCREL Semantic Analysis System) を用いている。⁵ 表 1 に示したように USAS Tagset の主分類は 21 である。これらはさらに、いくつかの下位レベルに細分類される。

³ Wmatrix の利用方法や、その他の詳細な情報は、<http://ucrel.lancs.ac.uk/wmatrix/>を参照。

⁴ BNC Sampler Written は、968,267 語からなる BNC Sampler written corpus である。

⁵ USAS Tagset については、<http://ucrel.lancs.ac.uk/usas/> を参照。

表 1 USAS Tagset 主カテゴリー

A general and abstract terms	B the body and the individual	C arts and crafts	E emotion
F food and farming	G government and public	H architecture, housing and the home	I money and commerce in industry
K entertainment, sports and games	L life and living things	M movement, location, travel and transport	N numbers and measurement
O substances, materials, objects and equipment	P education	Q language and communication	S social actions, states and processes
T Time	W world and environment	X psychological actions, states and processes	Y science and technology
Z names and grammar			

3. 「感情」についての意味分析

3.1 「感情」のカテゴリーとその下位分類

表 1 において、E (emotion) では、次の下位分類がある。⁶

E1 General

E2 Liking

E3 Calm/Violent/Angry

E4 Happy/Sad

E4.1 Happy/Sad: Happy

E4.2 Happy/Sad: Contentment

E5 Fear/Bravery/Shock

E6 Worry/ Concern/Confident

それぞれの下位項目には、さらに+、あるいは-の符号が付されて、その意味カテゴリーにおける、肯定的あるいは否定的な位置を示すことがある。Archer *et al.* (2002) では E4.1+ の例として *amused, cheerful* が、E4.1- の例として *dejected, despair* が示されている。

⁶ USAS については、Archer *et al.* (2002) (<http://ucrel.lancs.ac.uk/usas/usas%20guide.pdf>) を参照。

3. 2 *Snow Country*: Sad

瀬良 (2014) で行った *Snow Country* の意味分析では、BNC Sampler Written Corpus と比較して、もっとも多く用いられていた感情のカテゴリーは、表 2 に示したように、E4.1- (Sad) であった。このカテゴリーには、sad (21), emptiness (4), cried (3), embarrassed (3)などの語が含まれている (カッコ内の数字は生起数)。ヒロイン Komako の境遇を考えると、多くの読者がこの物語から受ける印象は「悲しさ」であると予想される。また、Komako 自身も、自らの感情を直接的に表現する [This makes me very sad (p.46), It makes me very sad (p.148)]。Wmatrix の分析結果は、読者やヒロインの感じる感情と一致するものであった。

表 2 *Snow Country* と BNC Sampler Written との感情のカテゴリーの比較

	<i>Snow Country</i>		BNC Sampler Written		LL	
	数	%	数	%		
E4.1-	73	0.20	979	0.10	27.86	Sad
E4.1+	90	0.25	1370	0.14	24.08	Happy
E1	32	0.09	373	0.04	16.79	Emotional Actions, States And Processes General
E3+	41	0.12	623	0.06	11.03	Calm

3. 3 *The Master of Go*: Worry

一方、*The Master of Go* を、同じく感情の意味カテゴリーにおいて、BNC Sampler Written Corpus と比較した結果が表 3 である。統計的に、もっとも多く用いられているのは、E6- (Worry) であった。

表 3 *The Master of Go* と BNC Sampler Written との感情のカテゴリーの比較

	<i>The Master of Go</i>		BNC Sampler Written		LL	
	数	%	数	%		
E6-	89	0.24	961	0.10	48.33	Worry
E3+	45	0.12	623	0.06	13.42	Calm
E3-	92	0.24	1647	0.17	10.15	Violent/Angry

E6- (Worry) のカテゴリーに属する語で、*The Master of Go* において、2 語以上用いられている語を、表 4 に示した。

表 4 E6- (Worry) に属する語

	数	%
trouble	12	0.03
concern	9	0.02
nervous	9	0.02
tension	8	0.02
worried	5	0.01
worry	4	0.01
tense	3	0.01
concerned	3	0.01
bother	3	0.01
apprehensive	2	0.01
suspense	2	0.01
distress	2	0.01
bothered	2	0.01
worrying	2	0.01
uneasily	2	0.01
care	2	0.01
troubles	2	0.01

もっとも多いのは **trouble** であり、**troubles** も 2 例ある。どのような文脈で用いられているか調べるため、**trouble** について、コンコーダンスを表 5 に示した。

表 5 trouble のコンコーダンス

time to time . " I have the same	trouble	myself , " said the Master . " I ha
ous indigestion as well . Otake 's	trouble	was more extreme . He was unique a
had , it seems , been aware of the	trouble	since spring . He had lost his appe
d practice in a ten-mat room . The	trouble	was that the eight-mat room next do
a circle over his chest . " I have	trouble	breathing, and I have palpitations
I have caused you a great deal of	trouble	, " said Otake . " Do care for your
, but I have to admit I still have	trouble	. " The season had come for horse
e is very upset . And he is having	trouble	with his digestion , I believe . "
ce , the Master should have had no	trouble	winning . As always , however , he
Black is thicker . White is having	trouble	. Our Master is getting a little se
s not enthusiastic , and he had no	trouble	defeating me even at a rook-bishop
was taken with chest pains and had	trouble	breathing . He died before dawn two

太字で示した **trouble** は the **Master** に関するものである。彼は病身であり、慣れない新しい規則のもとで戦っている。そのため、この作品において、感情を表すもっとも特徴的な語が **trouble** であるのは驚くにあたらない。それでは、先に見たように、裏表紙や Introduction

に記されていた loneliness や sadness という感情は、どこから呼び起こされたのであろうか。表 3 の E6-(Worry), E3+(Calm), E3-(Violent/Angry) や、表 4 に示した E6- に属する語からは、sadness が感じられない。

4. 意味カテゴリー分析結果

The Master of Go から感じられる sadness が、どこから呼び起こされるかを考えるため、まず、意味カテゴリーの分析結果の全体を概観しておこう。BNC Sampler Written Corpus と比較して、LL 値 615.64 から 70.63 で、*The Master of Go* に特徴的に多く用いられている上位 15 カテゴリーを表 6 に示した。

表 6 *The Master of Go* と BNC Sampler Written との意味分析結果(上位 15 位まで)

	<i>The Master of Go</i>		BNC Sampler Written		LL	
	数	%	数	%		
S7.1+	889	2.36	8413	0.87	615.64	In power
K4	196	0.52	738	0.08	383.62	Drama, the theatre and show business
Z8	3884	10.29	72023	7.44	352.66	Pronouns
T1.3	685	1.81	8327	0.86	287.50	Time: Period
K6	81	0.21	107	0.01	282.99	Children's games and toys
K5.1	267	0.71	2053	0.21	253.50	Sports
A8	195	0.52	1409	0.15	200.98	Seem
B1	435	1.15	5489	0.57	166.73	Anatomy and physiology
K5.2	42	0.11	68	0.01	134.67	Games
S7.3	48	0.13	103	0.01	134.20	Competition
O4.3	303	0.80	3747	0.39	122.06	Colour and colour patterns
X9.2-	66	0.17	369	0.04	91.21	Failure
M1	592	1.57	10157	1.05	80.50	Moving, coming and going
S7.3+	46	0.12	206	0.02	78.27	Competitive
B2-	122	0.32	1275	0.13	70.63	Disease

4. 1 S7.1+: In power

BNC Sampler Written Corpus と比較して、*The Master of Go* に、統計的にもっとも多く用い

られている意味カテゴリーは、S7.1+(In power) である。これは表 1 にあげた主要 21 カテゴリーの中の、S(social actions, states and processes) の下位カテゴリーである。具体的にどのような語が含まれているかを確認するため、このカテゴリーに属し、4 例以上用いられている語を、表 7 に示した。

表 7 S7.1+ (In power) に属する語

	数	%
master	569	1.51
board	126	0.33
managers	32	0.08
sir	18	0.05
won	12	0.03
power	9	0.02
control	9	0.02
invincible	7	0.02
victory	7	0.02
ranks	7	0.02
mahjong	7	0.02
masters	6	0.02
order	6	0.02
powerful	5	0.01
rank	5	0.01
organizers	4	0.01
forced	4	0.01
powers	4	0.01

ほとんどすべての語が、碁の試合と関連しており、この作品にこれらの語が多くみられるのは当然である。しかし、これらの語は、感情の表現と関連しているとは言えない。

4. 2 B1: Anatomy and physiology

表 6 にあげた、*The Master of Go* に特徴的に多くみられる意味カテゴリーの中で、どのカテゴリーが感情の表出と関連があるかを知るためには、それぞれのカテゴリーに含まれる語を、文脈において検討する必要がある。本論中に、すべての検討結果を紹介することはできないが、表 6 の S7.1+から B2-までのカテゴリーについて、文脈中で調べた結果、B1(Anatomy and physiology) が、もっとも密接に感情表現と結びついていると思われた。カテゴリーB1 に分類されて、7 例以上用いられている語を、表 8 に示した。

表 8 B1 (Anatomy and physiology) に属する語

	数	%
face	57	0.15
eyes	27	0.07
head	27	0.07
hair	17	0.05
hands	16	0.04
hand	14	0.04
chest	10	0.03
eyelids	9	0.02
eyebrow	9	0.02
body	7	0.02
back	7	0.02
cheeks	7	0.02
shoulders	7	0.02
legs	7	0.02
fingers	7	0.02
breathing	7	0.02
heart	7	0.02

カテゴリーB1 の中で、もっとも多く出現している語 **face** (57 例) のコンコーダンスの 20 行目までを、例として表 9 に示した。太字で強調したものが、**the Master** の顔について言及したものである。いくつか **dead face** が見られるが、これは語り手が **the Master** の死後、頼まれて撮影した写真に言及したものである。死者は感情を持つはずがないが、**the Master** の死に顔の写真に関連して、**feeling, feel** が用いられていることが、下のコンコーダンスから分かる。

表 9 **face** のコンコーダンス

side on his knees , his always pale	face	was blanched . Roused by the Master
ong . He also had a large , longish	face	, on which the individual features w
in the pictures I took of the dead	face	. I was most apprehensive through th
ns that if the pictures of the dead	face	were received in Kamakura she was to
diately was the captive of the dead	face	. The pictures were a success. They
low was the mark of death , and the	face	was tilted ever so slightly upward ,
ceiling struck the lower pan of the	face	; and , since the head tilted slight
tly pleasing melancholy to the dead	face	. The long eyebrow brought twinges o
t as always , a flicker crossed his	face	as if it had caught the shadow of a
rom the swollen-eyed , heavy-veined	face	, it too somehow came as a saviour .
yes closed and his head bowed . The	face	of the writer Muramatsu Shofu , who
unable to look up at the Master 's	face	. The sealed play , White 90 , was o

<p> nst the light , the outlines of his yebrow . In my pictures of the dead d that , I suppose , was that . The n the pictures . Was it in the dead as it in the dead face itself ? The neither of life nor of death . The ense see them as pictures of a dead r living nor dead . Was it that the </p>	<p> face face face face face face face face </p>	<p> seemed blurred , ghostlike . The roo , however , the right eyebrow was th was dead , and the richness and soft itself? The face was rich in feelin was rich in <u>feeling</u> , yet the dead was alive but sleeping . One might i and yet <u>feel</u> in them something neith came through as the living face ? Wa </p>
--	---	--

(強調は論者)

次に、具体的な文脈の中で、**face** や身体を表す他の語が、どのように使われているかを、いくつかの例を用いて検討しておこう。

I was struck by a certain intensity of feeling in the pictures. Was it in the dead **face** itself? The face was rich in feeling, yet the dead man himself had none. ... Was it that the **face** came through as the living face? Was it that the **face** called up so many memories of the living man? (p.29)

(強調、下線は論者)

死者が感情を持つはずがないことを理解しながらも、語り手は豊かな感情を、the Master の死に顔から感じとる。もちろん、語り手が自問しているように、生きていた頃の記憶と結びついているのかもしれない。しかし、the Master の顔それ自体は、特別な感情を呼び起こすものではなかったとも、語り手は説明する。

No one could have described the Master's **face** as handsome or noble. It was indeed a common sort of **face**, with no single feature of great merit. The **ears**, for instance—the **lobes** were as if they had been smashed. The **mouth** was large, the **eyes** were small. (p.29)

(強調、下線は論者)

それでも、次の引用に見られるように、語り手は the Master の閉じられた目から、sadness や grieving を感じる。同時に、discipline in art, the power to quiet his surroundings, force of spirit など、芸術としての基と結びついて、the Master の精神力も感じていることが分かる。

Through long years of discipline in his art, the Master seated at the Go board had the power to

quiet his surroundings, and that same force of spirit was in my pictures too. There was a deep sadness in the lines of the closed eyelids, as of one grieving in sleep. (p.29)

(強調、下線は論者)

次の引用箇所では、ultimate in tragedy, martyrdom of art の表現が見られる。芸術としての碁とともに消え去る運命の人であったことを、the Master の顔から、語り手が感じとっていることが、さらに明確にうかがえる。

There was something unreal about the pictures, which may have come from the **face**, the ultimate in tragedy, of a man so disciplined in an art that he had lost the better part of reality. Perhaps I had photographed the **face** of a man meant from the outset for martyrdom of art. It was as if the life of Shusai, Master of Go, had ended as his art had ended, with that last match. (p.30)

(強調、下線は論者)

しかし、the Master 自身は、顔やことばに感情を出す人ではなかった。

It was not like the Master to discuss his feelings so openly. He was not one to show emotion on his **face** or in his speech. (p.62)

(強調、下線は論者)

顔に感情が表れるとしても一瞬のことで、しかも、いったん碁盤に向かうと、その顔からは感情は、まったくうかがえなくなる。

An expression flickered across the Master's **face** as of astonishment or foreboding, and at the same time as of feigned bewilderment, meant to please and amuse. Even so an ambiguous expression was unusual for the Master. ... Seated at the board, however, he had not let his **face** reveal a trace of his feelings. (p.68)

(強調、下線は論者)

対戦者に対して、めずらしく怒りをあらわにした場合でも、碁盤に向かうと、やはり一切感情を見せないなのであった。

‘He makes a play like that, and why?’ growled the Master. ‘Because he means to use two days to think things over. It’s dishonest.’... I had not been aware, at the moment of play, that the Master was so angry and so disappointed as to consider forfeiting the match. There was no sign of emotion on his face or in his manner as he sat at the board. No one among us sensed his distress. (p.123)

(強調、下線は論者)

具体的な身体部分ではないが、the Master の姿 **figure** も、語り手の感情をかき立てることが、*brought tears to my eyes, profoundly moved* といった表現から分かる。さらに *sadness* という語が、ここに見られる。

Nothing more — and yet the retreating **figure** of the Master somehow brought tears to my eyes. I was profoundly moved, for reasons I do not myself understand. In that **figure** walking absently from the game there was the still sadness of another world. The Master seemed like a relic left behind by Meiji. (p.52)

(強調、下線は論者)

碁の観戦記をもとにした小説であるので、対戦中の会話より、碁を打つ姿など身体についての描写が多いのは、当然と言える。*The Master of Go* の場合、ここで見たように、身体の描写が、語り手の感情と密接に結びついていた。また、身体を表す表現と同時に、芸術としての碁、その殉教者としての the Master の運命の悲しさを示唆する、*the ultimate in tragedy, martyrdom of art, relic* などの表現も注目に値する。

4.3 S7.2+: Respected

4.2 に見たように、*The Master of Go* においては、B1 (Anatomy and physiology) という意味カテゴリーに属する語が、the Master や語り手の感情を描写するのに、重要な役割を果たしていた。他の意味カテゴリーでも、感情の描写に関わるものはないか、意味分析の結果をもとに確認しておく。表 10 は、表 6 に続くもので、*The Master of Go* と BNC Sampler Written との意味分析の比較結果のうち、LL 値が 67.54 以降の意味カテゴリーである。やはり *The Master of Go* に、対象とするコーパス BNC Sampler Written より、統計的に多く用いられているものである。

表 10 *The Master of Go* と BNC Sampler Written との意味分析結果(上位 16 位以降)

	<i>The Master of Go</i>		BNC Sampler Written		LL	
	数	%	数	%		
X3.2-	53	0.14	320	0.03	67.54	Sound: Quiet
A7	63	0.17	448	0.05	66.26	Probability
A3+	1202	3.18	24177	2.50	62.99	Existing
N5---	23	0.06	65	0.01	54.87	Quantities: little
L1+	26	0.07	93	0.01	52.87	Alive
K1	154	0.41	2058	0.21	50.78	Entertainment generally
X2.1	260	0.69	4139	0.43	48.54	Thought, belief
E6-	89	0.24	961	0.10	48.33	Worry
A13.1	68	0.18	653	0.07	45.92	Degree: Non-specific
K5	26	0.07	117	0.01	44.05	Sports and games generally
A1.7+	92	0.24	1071	0.11	42.64	Constraint
M8	63	0.17	610	0.06	41.94	Stationary
N4	368	0.97	6620	0.68	39.56	Linear order
Z6	433	1.15	8052	0.83	38.67	Negative
X2.6-	22	0.06	100	0.01	36.95	Unexpected
N3.8+	100	0.26	1282	0.13	36.82	Speed: Fast
S7.2+	39	0.10	316	0.03	34.41	Respected

表 10 にあげている意味カテゴリーに属する語を、文脈の中で調べていくと、S7.2+ (Respected) が、the Master、あるいは the Master に対する語り手の感情を表現するのに、関係があると考えられた。このカテゴリーに 2 例以上含まれる語を、表 11 に示す。

表 11 S7.2+ (Respected) に属する語

	数	%
respect	7	0.02
dignity	6	0.02
admiration	5	0.01
respects	2	0.01
admire	2	0.01
honour	2	0.01
respected	2	0.01
honoured	2	0.01

6 例見られる dignity は、先に見たように英訳版の裏表紙にも、‘a protagonist who in the face of

defeat and death maintains his dignity to the end' と、the Master の描写に用いられていた。表 11 において、上位の 2 語である respect と dignity について、コンコーダンスを表 12 に示した。

表 12 respect と dignity のコンコーダンス

all sides and angles , but out of	respect	for the dead man I could not bring
acted as I had , probably , out of	respect	for the Master . I should have been
heard , which quite dispensed with	respect	for elders and attached no importan
d attached no importance to mutual	respect	as human beings . From the way of G
importance . If the Master could not	respect	the original contract , then the ho
understand it perfectly -- I had to	respect	and admire the players . I was pres
entirely in anyone he was inclined to	respect	, and he was a man with a deep sens
was unwontedly meek . Perhaps the	dignity	with which the real professional fa
could as well be said to deny human	dignity	, and yet , in the balance , the in
was no margin for remembering the	dignity	and the fragrance of Go as an art .
board . There was a cold , severe	dignity	in it . For a time it was as if , f
as if it were a pursuit of supreme	dignity	and importance -- and I could not p
he remarked upon the extraordinary	dignity	with which Wu saw visitors to the d

Respect は主に、the Master や the players など碁に関して、あるいは elders や human beings など、社会一般について用いられている。否定的な意味を持つ quite dispensed with や attached no importance は、新しい碁について用いられている。Dignity は主に、碁に関するものである。以下に、これらの語が用いられている文脈を、いくつか示す。

It may be said that the Master was plagued in his last match by modern rationalism, to which fussy rules were everything, from which all the grace and elegance of Go as art had disappeared, which quite dispensed with **respect** for elders and attached no importance to mutual **respect** as human beings. (pp.44-45)

(強調、下線は論者)

目上の人や、人間としての相互の尊敬 respect に言及する箇所であるが、芸術としての碁と現代的な碁の対比が見られる。現代の碁については fussy rules など否定的な語が用いられ、芸術としての碁については、grace や elegance がその資質とされており、語り手の伝統的な碁についての敬意が読み取れる。

次の例は、具体的な身体の部分ではないが、身体に関する語 posture が、dignity と同じ文

脈で用いられたものである。碁盤に向かう the Master は、語り手にとっては、**dignity** の具現であると感じられているのであろう。

It was his posture at the Go board. There was a cold, severe **dignity** in it. (p.65)

(強調、下線は論者)

次の例では、**dignity** と **respect**、さらに、同じ S7.2+ (Respected) のカテゴリーに属する **admire** が用いられている。碁を芸術ととらえる語り手の、the Master に対する深い敬意がうかがえる。

To report on Go as if it were a pursuit of supreme **dignity** and importance — and I could not pretend to understand it perfectly — I had **respect** and **admire** the players. I was presently able to feel not only interest in the match but a sense of Go as an art, and that was because I reduced myself to nothing as I gazed at the Master. (p.89)

(強調、下線は論者)

観戦記事を報じる記者としての立場を、語り手は以下のように説明している。試合自体より対戦者たちを観察したことから、この作品で身体表現が重要な位置を占めていた背景が分かる。また対戦者たちを **monarchs**、試合の運営者や記者たちを **subjects** にたとえていることから、ここでも語り手の、碁に対する敬意が明確に読み取れる。

There was little chance that my amateur audience would understand the more delicate niceties of Go, and for sixty or seventy instalments I had to make the manner and appearance and gestures and general behaviour of the players my chief material. I was not so much observing the play as observing the players. They were the monarchs, and the managers and reporters were their subjects. (p.89)

(下線は論者)

S7.2+ (Respected)の意味カテゴリーに属する語群は、直接感情を表す語ではない。しかし、話し手の心の作用に関するものであり、多くは身体表現とともに用いられ、この作品において、感情を表現するのに重要な働きをしていると考えられる。

5. Balossi (2014)

感情が、E (emotion) 以外の意味カテゴリーで表現される例として、Balossi (2014) の分析例を紹介する。Balossi (2014) は Virginia Woolf の *The Waves* を研究対象としており、本論と同じく Wmatrix を用いている。意味だけでなく語と品詞も分析して、6 人の登場人物のことが、それぞれに異なる特徴を持つかどうかについて検証するものである。意味分析の結果、登場人物の一人 Susan が、自然に関連する意味カテゴリー L3 (Plants), L2 (Living creature), W2 (Geographical and farming terms) などを通して、感情を表現すると結論付けている。

... they represent the lexical source through which Susan conveys **her positive and negative emotions** and world-view in physical terms. (p.116)

(強調は論者)

Susan が自然に関する語彙を用いて、感情を表現することは、他の人物と異なる特徴の一つである。

From the extract above we can begin to infer one of Susan's most salient traits: her tendency to represent her **feelings and emotions** in highly physical terms, often conveyed by lexis related to the natural world. (p.117)

(強調、下線は論者)

Balossi(2014)の分析が示すように、感情表現の方法については、ある作家が、さまざまな作品において、あるいは、ある一つの作品においてさえ、常に同じ方法を用いるわけではない。

6. 結論

本論は、瀬良 (2014) の *Snow Country* や、Sera (2015) の *After Dark* の意味分析に続き、文学作品 *The Master of Go* における感情表現に注目して、意味分析を行った研究である。

文学作品においても、日常生活においても、感情をもっとも直接的に表現することばは、sad, happy などの感情を表す語である。Wmatrix を用いた意味分析の結果、*Snow Country* では、USAS Tagset の E (emotion) のカテゴリーの下位区分である E4.1- (Sad) が、もっとも特徴

的な感情カテゴリーであることが示された。これは、この作品から読者が受ける感情や印象と一致した。Balossi (2014)の例では、Virginia Woolf 作 *The Waves* の登場人物の一人 Susan は、自然に関する語彙で、自らの感情を表現していた。

The Master of Go では、意味分析の結果、もっとも特徴的な感情カテゴリーは E6-(Worry) であると示された。これは、翻訳版の裏表紙や翻訳者による Introduction に述べられていた sad という印象とは異なっていた。伝統的な碁の最後の名人、病身の the Master が、引退試合に敗れるというストーリーは、多くの読者に、「悲しさ」を感じさせることだろう。それでは、この「悲しさ」は、本作でどのように表現されていたのだろうか。E (emotion)以外の意味カテゴリーについて検討した結果、B1 (Anatomy and physiology) と S7.2+ (Respected) が、この作品において、感情表現と密接に結びついていることが分かった。

碁の試合には、碁石を打つ音が響くような静寂の感がある。挑戦者の大竹は、時々軽口もたたくが、全般的に静かな緊張感の中で、試合が行われる。碁盤に向かうと、感情を表に出さない the Master の孤高や悲壮さが、彼の顔など、身体の外面的な描写により伝えられるのは、自然なことだと思われる。

また、本論 4.3 でも論じたように、語り手は、伝統的な碁に深い敬意をいただいている。尊敬や威厳と関連のある意味カテゴリーである 7.2+ (Respected)の語彙により、語り手の the Master に対する感情が語られるのも、また自然なことだと思われる。

文学作品だけでなく、日常生活でも、わたくしたちは色々なことばや方法で、感情を表現する。直接「悲しい」や「うれしい」と感情のカテゴリーに属する語で表現することもあるが、ボディ・ランゲージや他のカテゴリーに属する語を用いて、感情を表現する方が、むしろ多いと考えられる。「雨が降っているね」も感情を表現することがあるだろうし、ときには、沈黙も効果的な感情表現手段である。

The Master of Go では、滅びゆく伝統的な碁の殉教者ともいえる the Master の感情や、彼に対して語り手がいだく感情は、「身体」と「敬意」に関する意味カテゴリーの語彙と結びつけて、効果的に表現されていた。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 15K02610 の助成を受けたものである。

参考文献

- 瀬良晴子 (2012) 「ディケンズ「信号手」とポー「アシャー館の崩壊」—恐ろしさを表す語彙比較—」『人文論集』47:99-110 兵庫県立大学.
- 瀬良晴子 (2014) 「*Snow Country* における感情表現の描写」『人文論集』49:71-85 兵庫県立大学.
- Archer, D., Wilson, A & Rayson, P. (2002) Introduction to the USAS category system. (<http://ucrel.lancs.ac.uk/usas/usas%20guide.pdf>) (28 November 2015)
- Balossi, G. (2014) *A Corpus Linguistic Approach to Literary Language and Characterization: Virginia Woolf's The Waves*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Kawabata, Y. (1937) *Snow Country* (trans. E. Seidensticker). Tokyo: C.E. Tuttle.
- Kawabata, Y. (1951) *The Master of Go* (trans. E. Seidensticker). London: Penguin Books.
- Rayson, P. (2009) Wmatrix: a web-based corpus processing environment, Computing Department, Lancaster University.
- Sera, H. (2015) 'Depictions of Emotions in Haruki Murakami's *After Dark* — A Semantic Analysis —', *Jinbun Ronshu* 50:69-90.
- Murakami, H. (2008) *After Dark* (trans. J. Rubin). London: Vintage Books.